



学校だより

1月号
横浜市立桜台小学校
令和2年1月7日発行

顔晴る

校長 小宮 健

令和となって初めての年明け。皆様におかれましてはお健やかに新年をお迎えのことと存じます。

さて、新春恒例といえば箱根駅伝（第96回東京箱根間往復大学駅伝競走）。今年も熱戦が繰り広げられました。私は自宅での観戦でしたが、2区と9区、特に保土ヶ谷駅⇔権太坂までの見慣れた風景がテレビに映し出されると、思わず沿道に本校の子どもたちが応援していないかと探していました。

私は、お正月になると、小学生の頃に父の実家近くの沿道で祖父と観た箱根駅伝や母方の祖父が連れて行ってくれた秩父宮ラグビー場での大学選手権を思い出します。当時の駅伝ではオープンタイプの四輪駆動車が伴走していました。OBとして母校の車に乗った瀬古利彦選手の精悍な姿。一方、寒空のスタンドで感じた、激しくぶつかり合うラグーマンの迫力、割れんばかりの大歓声（当時、ルールはよく分かりませんでした）。私にとって、このふたつの風物詩は祖父たちとの大切な思い出です。

桜台の子どもたちも将来大人になったとき、きっと年末年始の出来事や家族や親族との思い出を懐かしむときが来るのでしょうか。

また、お正月の風物詩のひとつとして、年始に届く年賀状があります。近年、インターネットとソーシャルメディアの普及、人との付き合い方や慣習の変化、人口の減少や核家族化など多種多様な理由から、年賀状を書く人が減ってきていることを知り、年賀葉書の発行枚数を調べてみました。すると、ピーク時は2003年の44億5936万枚。昨年（2019年）は23億5000万枚で、半数近くまで減少していることに驚き、時代の流れとはいえ寂しさを覚えました。

私自身、年を追うごとに、1年に1度だけ、年賀状で近況を報告し合う相手の数が増えてきているのも事実ですが、年賀状がなかったらその人とのつながりもなくなってしまいうような気がしています。年末に相手のことを思い浮かべながら年賀状を書く。元日、郵便ポストを開けて届いた年賀状を手にする。葉書で届くアナログ特有の温かみをこれからも大事にしたいと思うのです。

そんな中、先輩から届いた今年の年賀状にこんな言葉が記されていました。

『今年も顔晴りましょう！』

読み方は、顔晴る（がんばる）。「頑張る」の当て字です。意味はすぐに伝わりました。「頑張っている人の表情は輝いて見える。顔が晴れるように、笑顔になれるように頑張っていこう！」というメッセージでした。

思い立った私は、「顔晴る」という言葉を新年の朝会で子どもたちに紹介しようと、書初めに挑みました。桜台小学校の子どもたち一人ひとりが顔晴れる（頑張れる）よう、教職員一同、顔晴ってまいります。本年も桜台小学校をどうぞよろしく願います。